

2023年夏から25年夏まで、名城大学の在外研究員制度を利用し、アメリカ・イリノイ州シカゴに滞在した。目的は、近現代建築を文化資源とする、市民や子ども向け教育プログラムの調査と開発である。建築が専門家の領域にとどまらず、市民が自ら学び語る対象となる過程を明らかにしたいと考えた。

シカゴでは1871年の大火後、都市再建を契機にガラスや鉄、鉄筋コンクリートなどの新素材が導入され、近代建築のデザインと高層建設技術が発展した。五大湖の水運と鉄道

## 市民が主役の建築ツアー

現在、この都市の歴史を独り立ちできる。自分の住みかした建築観光と市民教育が、経済活動の一部を支えている。シカゴ建築センターが主催するシカゴ川クルーズでは、十九世紀末から現代までの建設技術や都市計画の変遷を、両岸に並ぶ高層ビルの実例とともに学ぶことができる。観光客だけでなく、市民にも人気の高い事業である。

多様性の議論への目配りも欠かさない。同センターの街歩きツアーでは、BIM（ビルディング・インフォメーション・モデリング）で設計された最新の高層ビルに、女性建築家のリーダーシップを見る。シカゴ南部地区でアフリカ系アメリカ人の音楽やアートに触れ、ウクライナ移民の居住区でその文化を学ぶなど、

研修の中で印象的だった言葉がある。「辞書になる。あなたが面白いのだから」。共通の知識は必要だが、まちの語りに個人の視点や感性を重ねることで、ツアーが唯一の物語となる。情報を伝えるだけでなく、意味を編み直すことが求められる。

AIが瞬時に情報を整理し、多種多様なパターンから物語を生成する時代にあつて、人が意味を編む学びとは何か。私たちの身体をとまなう知的訓練、すなわち世界を観察し、感じ、語る力は、いっそう重要になっている。こうした力は、学生教育だけでなく、企業や地域の人材育成にも通じる。確かな知識の上に、自身の感性や視点を磨き続けること。それが新しい価値を生む創造性につながる

# 意味を編む

# 学び目指して

結節点として栄えたこの地では、豊かな資本を背景に国内外の建築家が活躍した。



名城大学 都市情報学部准教授  
田口 純子

テーマは実にさまざま。こうしたツアーを支えるのが、ドーセントと呼ばれる市民ボランティアガイドである。300人を超える現役ドーセントが、80種以上のツアーを担う。ドーセントになるための研修では、参加者はまず体系的な講座を受け、大量の文献を読み、共通の知識を学ぶ。その後、経験者の指導のもとツアー実施を重ね、認証試験に合格して初めて

を学ぶ創造性につながる

たぐち・じゅんこ 専門は建築教育・都市環境教育。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修了。博士(工学)。1985年生まれ。

